2つの世界

千葉県立幕張総合高等学校　2年　寺内アンヘル　サクヤ

私は2つの世界を生きている。それは「先進国」という名の世界と「開発途上国」と呼ばれている世界だ。

日本での私の名前は、寺内アンヘル　サクヤ。日本は母の国だ。父の国、エルサルバドルでは、アンヘル・サクヤ・ミューレル・テラウチとなる。エルサルバドルは中央アメリカに位置し、隣国はグアテマラとホンジュラス、南部は太平洋に面している。私は日本で生まれたが、幼稚園から中学校までは、エルサルバドルのサンタアナで育った。第2の首都と呼ばれるこの街には、コアテペケという美しい湖があり、火山に囲まれた自然豊かなところである。エルサルバドルの気候は温暖で1年中半袖シャツで過ごせてとても快適だ。しかし残念なことに当時のエルサルバドルは殺人発生率世界最悪という状況下にあり「マラ・サルバトルーチャ」と「バリオ18」の2大勢力となるギャングが市民の生活を脅かしていた。現に、私が住んでいた地区でも母親と娘が椅子に縛られ、家財道具全てを強奪されるという事件が発生した。また、ギャングはみかじめ料を収益源としているため、小さな店にも高額な取り立てをする。支払いができなくなると店主の命に危険が及ぶ。近所の店が急に閉店することがよくあった。両勢力の縄張りの境目にあった祖母の家が抗争に巻き込まれ、壁に大きく18とペイントされ警察沙汰となったこともある。

両親はエルサルバドルの治安を懸念して日本に移住することを決意した。私が中学1年生の時だった。スペイン語で授業を受けていた日々が、次の週から一転して日本語になった。日本語は母方の家族と会話する程度だったので、小学1年生の漢字から勉強しなければならなかった。日本語を読むのもままならない上に小学校の基礎知識が全くない私には学ぶことが山ほどあった。特に理科や社会には苦労した。そして沢山の衝撃もあった。世界地図が日本を中心にして書かれていること、そして、父の国は開発途上国であり、先進国である母の国から支援を受けているということ。勉強だけではない、生活習慣も一変した。今までは子どもだけで道路を歩いたりバスに乗ったりすることは許されなかった。毎日両親に車で学校の送り迎えをしてもらっていた。しかし、日本では徒歩で通学する。「日本は安全だから」と笑う母を信じて一人で中学校に通い始めたが、何とも落ち着かず不安だったのを覚えている。日本に住み始めた頃、兄と夜道を歩いていてこんな会話をした。「エルサルバドルだったら銃声が怖いけど、日本だったら何が怖いかな？おばけかな？」日本が平和な国であることを実感した瞬間だった。

両国に住んできた私の疑問はただ一つ「なぜ開発途上国と先進国が存在するのか」だ。地球というひとつの星に住んでいる仲間として、資源や技術を分かち合い、共に成長していく道はなかったのだろうか。もし、国という括りが格差を生み出すために構築されたのであれば、その分厚い壁を打ち破る時代がきていると私は思う。地球的視点に立った富の分配とは？「10 個のりんごを 10 人で分けたら 1 人 1 個ずつ」そんな簡単な計算もできないこの世界を私達の手で変えていかなければならない。

私にとって、「次の世界」とは私の中にうずまく 2 つの世界を融合させた世界。「鍵」となるために今の私ができること。それは、メッセンジャーとして沢山の人に私の体験を発信すること。そして、周囲の人達の「地球人であること」への目覚めのきっかけになりたい。